

安心の地域
医療を支える



ジェイコー JCHO × ニュース Japan Community Health care Organization

2018 WINTER 冬号 | ジェイコーニュース | vol.16

独立行政法人地域医療機能推進機構

CONTENTS

P.02 ニュース

地域医療機能推進学会より

P.03 JCHO 版病院総合医育成プログラム参加医師からの寄稿

東京新宿メディカルセンター 医師 長原 慶典

登別病院 医師 小林 正宏

P.04 【連続企画】

病院長に聞く⑨

東京新宿メディカルセンター 院長 関根 信夫

東京高輪病院 院長 木村 健二郎

神戸中央病院 院長 大友 敏行

司会：理事（総合診療医・病院経営担当）内野 直樹

P.08 【特集】 第3回 JCHO 地域医療総合医学会

継続テーマシンポジウム・シンポジウム座長より

熊本総合病院 院長 島田 信也

本部 企画経営部 患者サービス推進課長 吉浪 典子

久留米総合病院 院長 田中 真紀

本部 理事（総合診療医・病院経営担当）内野 直樹

高岡ふしき病院 院長 高嶋 修太郎

秋田病院 院長 石岡 隆

相模野病院 院長 大井田 正人

東日本地区事務所 統括部長 木村 晴行

《きょうは『将棋の日』》

一般社団法人 地域医療機能推進学会 事務局長 中村 仁

参加者の声

演題一覧

P.14 【トピックス】

理事長特別賞 埼玉メディカルセンター 院長 細田 洋一郎

チーム表彰最優秀賞 玉造病院

チーム表彰優秀賞 宇和島病院／東京新宿メディカルセンター／四日市羽津医療センター／大阪病院／伊万里松浦病院

P.16 【JCHO GROUP】 全国病院 MAP



JCHO 版病院総合医
育成プログラムが
スタートして

連続企画 病院長に聞く⑨

特集

第3回 JCHO 学会
JCHO による
新しい地域医療の覚醒

ジェイコー JCHO × ニュース Japan Community Health care Organization NEWS

● 11月16日 院長会議

● 11月17日 第3回 JCHO 地域医療総合医学会
～ 18日

2018年

● 1月4日 尾身理事長からの新年の挨拶メッセージを配信しました。



地域医療機能推進学会より

『第6回事務セミナー』を開催しました

この度、本学会の事業の一環として実施する8回目の学会セミナーとして『第6回事務セミナー』を多数の皆様方にご参加いただき、下記の内容で開催しました。

今後も各種テーマを設定し開催してまいりますので、皆様方のご参加をお待ちしております。

日時：平成29年11月22日（水）13：00～16：00

会場：JCHO 本部研修棟 地下大会議室

テーマ：「各病院が取り組むべき課題」について

- ① 現況報告及び取組に関する好事例について
- ② DPC 包括点数と出来高点数の比較（薬剤）検証について
- ③ 課題の一部内容の見直しについて
- ④ 平成29年度後期に取り組む新たな課題について

その他

講師：JCHO 本部担当者

参加者：130名





JCHO版病院総合医育成プログラム 参加医師からの寄稿

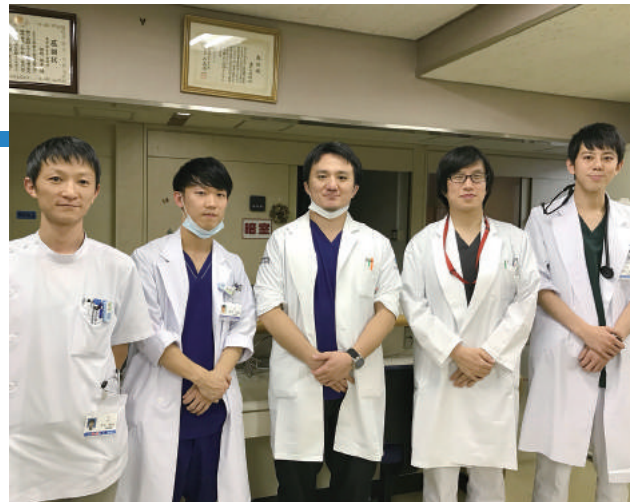
全人的な医療を行う医療者を目指して

東京新宿メディカルセンター 医師

長原 慶典

JCHO 版病院総合医育成プログラムに本年度より参加している長原慶典と申します。プログラム1年目も後半にさしかかり、このたび寄稿の運びとなりました。

呼吸器内科医として勤務ののち1年間臨床を離れ、現場に復帰をする際、臓器にとらわれず全人的な医療を行う医療者でありたいと考えるようになりました。本プログラムは、2025年2035年問題を控え急速にニーズが増大していく総合診療医の育成を目標とし、私の目指す領域にも近いことから参加をすることとなりました。本プログラムは全国のJCHO病院の中で個々人のニーズや目標に応じたオーダーメイド研修が可能で、現在私は生活習慣病診療や総合診療中心の研修を東京新宿メディカルセンターで行っています。同院は専門診療科の医師も総



総合診療チーム「チームG」（筆者中央）

合診療志向を持っていることが多く、診療科の垣根も低いため幅広い知識・経験を積むことができ、充実した1年目を過ごしております。来年度は2年目を迎えますが、幅広いキャリアデザインが可能な本プログラムでたくさんの経験を積んで参りたいと思います。

地域医療に重きを置く選択

登別病院 医師

小林 正宏

JCHO 病院総合医育成プログラム1期生として、本年度4月から受講中の小林正宏です。初年度は、もともと勤務していた東京新宿メディカルセンターに続き、地域医療研修として愛媛県の宇和島病院を経て、現在は北海道の登別病院に勤務しております。

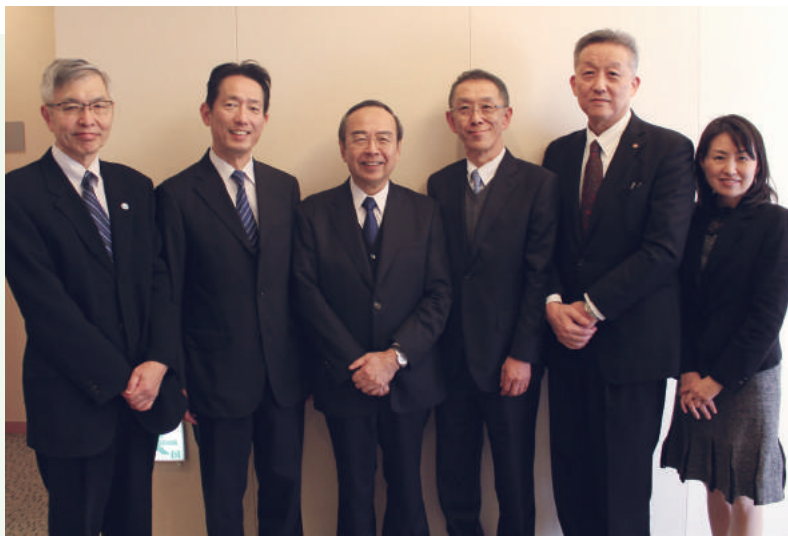
プログラム1年目においては、自分の場合は地域医療に重きを置く選択としました。宇和島、登別病院はいずれも常勤の内科医師が2~3名という規模であり、呼吸器内科の範囲に囚われない分野についても、のびのびと研修させていただいております。また、両病院とも新参者である私のことを非常に歓迎いただいております。働きやすい環境でもありました。



次年度は、中京病院で専門的な分野での経験を積ませていただきたいと思います。同じ大規模病院でも、東京新宿メディカルセンターや、地域の小規模病院とまた異なるアウェーでの勤務で、不安も大きいですが、頑張っていきたいと思います。

JCHO版病院総合医 育成プログラムがスタートして

内野◆ようやくJCHO版病院総合医の1期生が2人スタートしました。第1期生2人を受け入れていただいた東京新宿メディカルセンター関根先生から現状についてお話を伺いたいと思います。



関根◆現在、プログラムの研修医を2名受け入れております。それぞれバックグラウンドが違いまして、1名は公募で応募してきた方です。当院に赴任した当初は、いわゆる病院総合医、大きい病院というよりは中小病院も含めて活躍

したいと話していました。内科を中心に回るといって希望に応じてプログラムを組むわけですが、「チームG」という当院の総合診療チームにも加わっていただいています。今年度後半の希望を募ったところ、感染に関連した検査部での実習、医療安全活動への参加など、診療とはまた違った切り口の病院機能に関わることをやりたいと言っています。最終的にどのような医師となるかはまだ決めかねているようですが、少なくともこうした経験を積むことによって総合的なセンスを養うことができますし、彼が専門医を取得する場合、そのようなキャリアプランも可能ではないかということと今、順調に進んでいます。

もう1名は初期研修以来、当院で継続勤務しています。彼はなかなかユニークなところがあります。主な所属は呼吸器内科でしたが、新島での診療を毎年3か月ぐらいずつやっていたという、へき地や地方の勤務にすごく親しみがある方です。そして今年、プログラムの特徴だと思えますが宇和島病院、登別病院とJCHO内の地方の病院で働いてくれている。宇和島病院での勤務を提案したときには少し躊躇していましたがお陰様でとてもハッピーに仕事をしていると聞いています。彼の資質だと思うのですが、地方やへき地



東京新宿メディカル
センター 院長

関根 信夫

も含め多様なフィールドで診療できる柔軟性を持っていると感じます。おそらく開業も視野に入れて総合医的なものを目指すのではないのでしょうか。病院でしばらくは広く経験を積みたいのかもしれませんが、特に特化したプログラムは考えていません。当院の機能を十分に活用しながら、キャリアプランに合わせたプログラムを進めていただいています。



東京高輪病院 院長

木村 健二郎

木村◆JCHO版病院総合医に関しては高輪病院の場合、特徴として感染症を中心とした総合医の育成に協力できると申し上げてきました。感染症内科は総合的な診療能力を要求される診療科で、総合医としての信頼性も高いと思っていますので、感染症内科だけではなく総合内科も標榜し、主に研修医教育を通して総合医を育てることに貢献してもらっていました。しかし、人事の関係で、今年度は感染症内科医が1名になったことと、プログラムで当院に応募した方がいませんので、現在は協力できていない状況です。

当院は複数の大学病院からの派遣が多いため、それぞれの診療科が専門性を発揮するだけではやっていけません。総合診療能力を持った医師がベースに

あつて、その上で専門医の力を發揮してもらふ必要があると思つています。

典型的なところでは救急医療です。昨年度から救急外来を昼間もオープンしたのですが、救急外来には様々な症状を訴えて患者さんが来ます。症状の聴取から始まって診察、診断をしていくプロセスを学び、臨床推論を磨く非常に良い機会になります。そこで研修医教育を兼ねて、感染症内科医が交替で研修医と一緒に救急患者を診てくれました。しかし、今年度から感染症内科医は1人になりましたので、内科が交替で診たり、東大の救急部から医師を派遣してもらつて昼間の救急外来をやつてもらつたり、済生会中央病院からも1人救急医が来てくれて、そういう応援を受けながら昼間の救急外来と研修医教育を継続しています。

また、毎週火曜日の朝7時半から1時間ぐらい臨床推論を養うために、研修医同士で救急外来で診た患者さんをプレゼンテーションさせる研修医教育カンファレンスをやっています。昨年度は感染症内科の医師の主導で行つていましたが、今年度からは2年目の初期研修医が1年目を教育するという屋根瓦方式も取り入れている他、診療科の医師の講義も適宜入れています。

大友◆これまで神戸では総合医と謳つてはいましたが、総合医とはこんなもんだよという形では募集はしていませんでした。例えば5人の応募があったとしたら5人とも思いはバラバラでした。ですからその思いを全部、枠に入



神戸中央病院 院長
大友 敏行

れるということとはほとんど難しいし、できないと言つたほうがいい状態でした。JCHO版病院総合医の話が出る前まではできるだけ個人のニーズに合った指導体制を組んでいました。極端な例では循環器と血液内科を両方したいという人もいたわけです。そういった方が循環器に患者を持ちながら、あるときは血液の患者も持つて、両方の部長から彼の教育の責任を持つてもらつてやつていくとか、いろんな多様性を持つた形でやつてきました。

研修医教育という場面に關して

内野◆現在のJCHOでは、初期研修医や後期研修医を地域医療研修で派遣をする際に、指導医のいる状態で受け入れる場合と、常勤医師が出来る範囲で受け入れる場合、行くほうも受け入れるほうもだいたい差が出ていると思えます。JCHO版病院総合医というものは基本的には卒後6年以上、もう既にある専門資格を持つている先生が対象にしていますので、そういう方たちが育つと、初期研修あるいは後期研修の研修医教育へ非常に貢献してくれると思つていますが、研修医教育という場面に關してはいかがですか。



司会：理事
(総合診療医・病院経営担当)
内野 直樹

大友◆研修医教育は様々な方法があり、一カ所の病院では無く、他の病院に一定期間出向いてその場で得意とする研修を受けるという方法が、一面では医師不足の解消にもなつて理想的なのかもしれません。また、総合医が育つて、彼らが指導医となれば総合的な医療マインドを持った医師を育てられると言ふ意味で最適なのかもしれません。だれど総合病院においては、それぞれの専門医が既におられますから1人が付きつ切りで2年間、3年間指導するのじゃなくて、循環器や消化器、麻酔科など専門医から期間ごとに習うことは十分できるのも事実です。

木村◆そういう意味では総合医が研修医を教育することが重要だと思つています。もちろんそれぞれの専門医が自分の立場で専門診療を教育するのも大事ですけど、まず様々な分野にわたつてきちんと物事を考えられるようになることが大事だと思つています。

昨年度は総合内科をまず2カ月必修にしましたが、これは良かったと思つていますが、胸痛から心疾患か思い浮かばないようでは困りますので。ただ、総合内科を2カ月必修にすることで他の診療科から不満が出るというのはありました。

関根◆初期研修のプログラムは必修も含めて、構造と理念が決められているの

で、それに従つて粛々と行つしかありません。その後の専門研修も結局は総合的なプログラムになっていきます。だから総合力というのは常に求められていますし、病棟の診療体制も備えていなくても総合医のマインドを持つていくかどうかが大事だと思つています。当院の場合は総合内科体制を採つていますが、総合チーム(チームG)もありますので比較的総合医教育に適した環境ではないかなと思つています。

JCHO版病院総合医育成プログラムのプログラムなので、もちろん「総合」ではありますが、感染制御とか医療安全とか、どちらかというとなメジメン卜的な部分ですすね、少し大人になった医師の教育としては、そうした点でも幅を広げていくのがJCHO版病院総合プログラムに求められることではないかと考えています。

内野◆「研修期間の短縮」、「東京を拠点に考えたときの北海道や九州の病院まで研修へ行きづらいため、エリアの病院で協力できないか」等、いろんなご意見をいただいています。

また、将来JCHO版病院総合医認定取得後の自分のキャリアにどういうメリットがあるのかが少し明らかでないという問題点があるとは思つておりますが、その辺いかがでしょうか。

関根◆正直申し上げると、現在研修中の2名とも研修を受けてはいるが将来のキャリアプランも定まつていないし、ど



んなメリットがあつてどういう役割を果たすのか、現時点では全く確立してないと思うのです。従って、我々がモデルを作つて「(病院) 総合医」のアイデンティティーや、周囲がどうやって認めてあげるかが重要だと思つています。JCHO病院の中で総合診療を志す医師たちを受け入れ、彼らが一体どういう活躍をできるのかを実際のモデルとして示していかないと、本当の意味で具現化されないのではないでしようか。

木村◆医師は大学から市中病院に派遣されてまた戻るといふ今までの流れの中で、若い人たちはもう自分の専門さ

しつかりやればいんだつていう考えを持ちがちです。ただ、そうではなく日常診療、特に救急診療においては総合診療メインで求められます。市中病院に来るとトレーニングされますが、やはり彼らは総合医ではなくて専門医なんです。その中で総合医を育てていくJCHOプログラムでどういう風に彼らが生かされていくのかはJCHOの中で示していく必要があるかと思ひます。JCHOは地域医療を意識して、地域医療の活性化、地域医療の中心になっていく病院だという立場から考えれば、そういう医師が活躍できる場、あるいは活躍できるチャンスを見せていく必要があります。

私も大学で経験してきましたけど、どうしても現状では専門医は専門医のほうが上と考えがちで、総合医と専門医との関係はなかなか難しい。総合医というところ、どうしても入り口だけあって後は専門医に任せただけじゃないかとか言われてしまう。それだと彼らがかわいそうで、実際にはやりがいを出てこないだろうと思ひます。関根先生がおっしゃつたとおり、総合医としてどういう働きができるかということをお私たちがこれから示していく必要があるのではないかと思ひます。

JCHO版病院総合医に魅力を感じてもらつためには

内野◆志のある方たちが多数JCHO版病院総合医というものに魅力を感じて

くれて集まつてもらつたために、「こういうことをやつたらいい」ということがあれば教えていただきたいのですが。

大友◆まず一つは今、プログラムの期間が2年から3年となつていますよね。それは固定しないほうが僕はいいと思ひます。例えば、現在は眼科の専門医ですけど総合医をしたい。この方の場合、それは2年、3年は要るかも分かりません。だけど、あらゆる人に参加してもらおうと思つたら門戸を広くしないと集まらない。プライマリ・ケア学会の3年終わつてくる人たちとか、内科系の基礎ができている人とそうじゃない人の区別をするようなプログラムも用意することが必要だと思ひます。

要するにテーラードの形を用意していることは一つのアピールポイントになると思ひます。自身の選択した期間で研修ができれば、一人一人が自分でやりたいこともできる。20年先までは知りませんが、今のJCHO病院であれば57病院のどこでもそのように育てた総合医は通用するはずですよ。

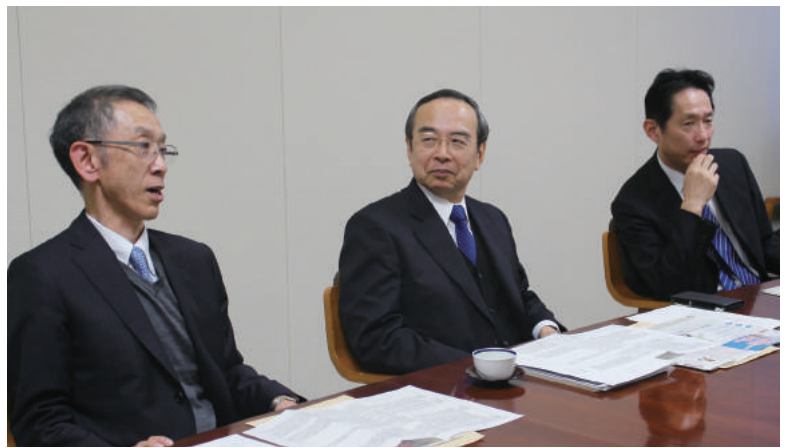
2つ目は、若い人、学生さんは全て大学の授業もスマホでやっていますよね。行列のできる店は誰かが撮つた行列風景を見て行きなくなる。そういう時代ですから写真でアピールできることは非常に役に立ちます。去年ぐらいまで1カ月から2カ月に一遍、徳田安春先生に来ていただき、近くの病院、大学にアピールして夏休みを利用した夏季集中トレーニングを開催できました。他の病院の先生方に徳田先生も交

えた症例検討は非常にアピールになりました。知名度の高い指導医に毎日来ていただくわけには当然いかなしいし、週1回でも難しいかもしれないが、例えば2カ月に一遍でも年6回来ていただけますよね。ホームページに書けますし、写真も載せられる。そういうことがあれば次の初期研修医だとか後期研修医もそれを見て集まるわけですね。こういった宣伝効果が、実になると思ひます。その先生が東京も含めて他の地方も回られたらいいのかなと思ひます。

木村◆実際、研修医や若い医師は教育を受けると、その場の写真を撮つてすぐSNSでアップする。それがすごい効果がありますね。これは今までなかった現象ですね。お金をかけて広告を出すより、彼らの力を借りると効果がありますね。

内野◆例えば、本部でセミナーをやつてもある程度決まつた方たちが集まれると思つているわけです。ですが、先生がたのお話はそれよりも関東だとか関西だとか実際の現場の病院に行つていただいて、集めていただくほうが良いということですかね。もし希望する病院があれば、本部が依頼をして各施設に行つてくださるという形にしたら、行つていただいた病院に対して効果はあると。

大友◆ものすごくありますね。ですが、東京だと1病院のみに集まつても他の病院は自分のホームページに載せづらいので、数が少なくても多くの病院に行つていただく方が望ましい。それとSNSに出す人ですね。例え



ばファッションの業界。女性だったら分かると思いますけど、自分がフォローしているモデルが朝、自撮りしてつぶやく。それを見たらすぐにお店へ行かないと夕方には売り切れ状態になるように、SNSでアピールするには沢山フォローワーを抱えている人が適していますね。

内野◆病院も努力をするし、計画や中身もきちんとしてから、なおかつ外向けにはそういう手法も排除しないで取り入れていくというやり方ですかね。

総合医を目指す方たちとの間の連携は比較的うまくいっていますか。

関根◆当院の体制はいわゆる総合内科という、従来の「ナンバー内科」と同じ

ような感じですよ。 「チームG」は基本的に各分野の専門医が集まってチームを作るんです。そこで総合診療をやっているので、各医師は自分の専門のことしか分からなかったとしても、総合医マインドは持っていると思います。それからレジデントは、基本的に最低1年は各病棟をローテーションさせる体制になっていますので、総合診療に対するアレルギー、反発はあまりないと思います。

木村◆総合内科医としては救急をやりながら研修医を指導し、患者さんが入院するところの入り口をやって後は専門医に任せるということで、総合内科医と専門医の間に軋轢が生じることもありました。

外部と連携した様々な学習手段

内野◆JCHO版のコア・カリキュラムの中に入っている臨床疫学ですとか、病院でできない座学のようなところに關するすみ分けはどうお考えですか。現在、学会や大学にお願いをして、良いお返事もいただいております。臨床倫理は大学より現場の病院で教え込んだほうが良いと思います。

関根◆そうですね、大学での経験は非常に魅力的だと思います。レジデントの中にアカデミックなところに触れてみたい人も当然いるでしょう。様々な講習・研修を企画している団体もありますから、勉強に出ていくっていうのは非常に良いことだと思います。

木村◆定期的ではないですが、徳田安春

先生のような外部の医師が指導医として、研修医を連れて病棟回診してくれたり、カンファレンスをやってくれたり。非常に良かったですね。JCHO内でもそういうことができるの良いと思います。

内野◆いずれにしてもこのJCHO版病院総合医というのは1期生、2期生、3期生くらいの方たちに将来、核となっていたらいい、この方たちがうまくJCHOなり他の病院で指導員として頑張っていたらいいかなれば、ようやく軌道に乗るだろうと思います。恐らく数年かかるでしょうが。最後に、本部への要望ございましたら伺います。

関根◆プログラムで企画している海外留学の話などを具体化していくことですね。それから一病院ではとてもできないことを、他の団体や大学との連携で補完していただくと、とても世界が広がると思います。JCHO内の病院派遣については、実際に赴任した医師を見ても分かりますが、実は地方に行ったら行ったで結構楽しんでるんですね。決して悪いことではないと思っています。特に比較的若い時期でしたら、いろいろな地域での経験を重ねること、診療能力の幅を拡げることでもできますし。

木村◆このプログラムが終わった後どういう医師になっていくかというイメージを具体的なもので提示していければ良いと思います。もう一つ言うと評価をどうするか。これは難しい。資格が必要かどうかは別として、総合医の

評価はすごく難しいと思います。ただ、評価がないとこれもまたモチベーションに繋がりません。その評価に応じてJCHOの中で何が提示できるかですね。あるレベルをクリアしたら海外留学の道もありますよ、といったこともあると思います。

大友◆総合医になりたい医師はある程度多くいると思います。ただ、その総合医たるものの中身の思いは様々です。ですから画一的な総合医でなく、一人一人違う総合医を目指すプログラムを用意することができればと思います。たとえば新専門医制度では、ある専門医の資格を得た医師が、偏った分野だけで無く総合医としても活躍したいと思ってもダブルボートはプログラムの構成を見ることが現実問題として許されていません。JCHO版病院総合医ではそれに近いことができますよということをおアピールするだけでも、このプログラムに応募が来る一つの要素になると思います。

内野◆急いで対応を考えなければならぬことですか、すぐに改善できることもありますが、必ず先生方に頂戴したご意見をこのJCHO版病院総合医育成プログラムに生かせるようにいたします。今日はお忙しい中本当にありがとうございました。



特集

第3回JCHO地域医療総合医学会

JCHOによる新しい地域医療の覚醒



2日間で約2000名が参加しました



将棋棋士

羽生 善治氏

平成29年11月17日（金）、18日（土）の両日、東京都港区のTKPガーデンシティ品川・JCHO本部研修棟を会場として第3回JCHO地域医療総合医学会が開催されました。

メインテーマは「JCHOによる新しい地域医療の覚醒」。

絹川常郎会長（中京病院院長）による会長講演「私の出会いと学び、それをJCHOのミッションに生かすために」、特別企画「JCHOが地域から信頼される病院となるための提案」、地域医療・地域包括ケアへの貢献や総合医の育成等をテーマとしたシンポジウム、一般演題の口演発表及びポスター発表が行われました。

開会式では、尾身茂理事長から、更なる地域からの信頼を得られるようにと挨拶がありました。

来賓の武田俊彦厚生労働省医政局長が

ら良質な医療・介護の提供に資する取り組みや経営改善の推進、総合医育成への取り組み、地域包括ケアの実現に向けての労いのお言葉を頂戴するとともに医師の偏在対策、働き方改革、地域医療構想への達成に向け、JCHOらしさを出して地域の議論を引っ張っていくよう激励をいただきました。

特別講演では、史上初の永世7冠を達成された羽生善治棋士から、今では各分野で話題になる人工知能ではあるが将棋界ではいち早く人間対人工知能という戦いの場を設け、人工知能とはどういうものかを早くからお考えになられている先生ならではの講演でした。

今回の特集では、2日間で約2000名が参加し、大盛況で閉幕した当学会の様子を、核となる催しである各シンポジウムを中心に紹介いたします。



会長（中京病院 院長）

絹川 常郎



学理事長／JCHO 理事長

尾身 茂



厚生労働省医政局長

武田 俊彦氏

継続テーマシンポジウム1

「地域医療の革新と地域づくり」を終えて

座長（熊本総合病院 院長）

島田 信也



JCH Oのミッションの大きな柱である「地域医療の革新と地域づくり」

は、継続シンポジウムとして、学会会員が常に「革新」についての問題意識を持つとともに継続的にかつ全職種によって横断的に論ぜられることが極めて重要である。今回は、細田洋一郎院長の流石に気配りが行き届いた素晴らしいご司会の下、椎葉茂樹厚生労働大臣官房審議官、関塚永一和光福祉社会理事、猪山賢一熊本総合病院病理部長、新町智穂宮崎江南病院看護部長に様々な角度から地域医療ならびに地域包括ケアについて、現状ならびに将来としてその課題をご発表いただいた。フロアとの討議も活発に行われたため、許可を得て10分間延長するほどで、最後に尾身理事長にもコメントをいただいた。年々、この継続シンポジウムの目的である「革新」に迫る覚醒が感じられ、大変実りあるシンポジウムとなった。

継続テーマシンポジウム2

「特定行為研修制度を活用した地域医療への貢献に向けて」

座長（本部企画経営部 患者サービス推進課長）

吉浪 典子



JCH Oは公的病院グループとして初めて、平成29年3月29日付で厚生労働

大臣が指定する特定行為に係る看護師の研修制度の研修機関（13行為10区分）となった。そして、4月より34病院80名の研修がスタートし、看護師が働きながらインターネット上で放送大学のオンライン授業を受講する第2学期を迎えている。本シンポジウムにおいては、取り組み初年度ということもあり、研修内容が具体的にイメージできるよう、実際の指導方法・内容や学習方法などについて、指導者・医師・研修修了生といった立場の異なる4名の演者から様々な視点でご発表いただいた。外部からの聴講希望者や、会場からの質問もあり、関心の高さも伺えた。医療の質向上を前提としたチーム医療のキーパーソンとしての看護師の役割、活躍の場の拡大についての意見交換も行われ、特定行為研修を取り組む病院

にとっても逡巡している病院にとっても、本研修制度の意義への理解を深める有意義な時間であったと考える。特定行為研修の充実とさらなる普及推進につながるよう、今後も病院と連携協力しながら引き続き検討を続けていく。

継続テーマシンポジウム3

「人材の育成」印象記

座長（久留米総合病院 院長）

田中 眞紀



シンポジウム3「人材の育成」は継続テーマの一つである。

総合医育成部門は、総合診療に熱心に取り組んでいる札幌北辰病院、星ヶ丘医療センターから各病院の総合診療科・総合内科の現状と課題が報告され、本部からは既に開始しているJCH O版病院総合医育成プログラムについて報告された。総合診療科・総合内科は、院内での位置づけや他科との関係等で課題が多くある一方、入院患者の獲得や研修医の教育に大きな可能性を持つていることが示された。また、JCH O版病院総合医育成プログラムは、今後

の参加医師獲得のため、こういった広報が有効であるか討論された。

看護師育成部門は、特定行為看護師と中堅看護師の育成に関して、院内でかかえる問題点と対策が討論された。特定行為研修では、看護管理者が特定行為研修の講義を聴講することやワールドカフェ方式で意見交換をすることで修了生の役割を理解することが出来たとの報告であった。中堅看護師への研修方法については、「社会人基礎力評価」を用いて弱点を抽出し能力要素を把握することによって研修を組み立て、自分の果たす役割を認識できたとの報告であった。研修をするだけでなく、その後職場において能力を十分に活かし、当事者のモチベーションを落とさないような体制をつくることが重要であると改めて認識する発表であった。

継続テーマシンポジウム4

「事務職に望むこと」

座長（本部 総合診療医・病院経営担当 理事）

内野 直樹

継続シンポジウムも前回、今回とようやく内容が伴ってきたという印象を受けた。日本経営演者2名による経営不振病院への取り組みは、現場に即した具体的内容で極めて有用だった。中城、万代両



院長からの指定発言も示唆に富み、同じ悩みを抱える他病院に大きな参考になる

ものと感じた。惜しむらくは、①会場からの意見がシンポジウムと無関係の陳情者のような内容を発表してもらいたかったことであるが、これは次回への課題であり、次回こそ現場からの力強い意見発表と会場出席者との活発な意見交換が行われるものと期待している。

シンポジウム1

「地域包括ケアにおける
認知症への取り組み、
これまでとこれから」

座長（高岡ふしき病院 院長）

高岡 修太郎



タイトルのテーマでシンポジウム1を企画し、徳山中央病院の那須誉人院長と

筆者の2人で座長を担当し進行した。
1) 「地域包括ケアにおける、もの忘れ外来」の役割」と題して、筆者が発表

した。認知症診断においては治療可能な認知症を鑑別することが肝要である。そして、合併症を含めた治療方針に加え、認知症看護認定看護師の協力で作成した認知症患者の背景シートを参考にケア方針を検討し、一週間の生活リズムを構築する必要性を強調した。

2) 「急性期病院における認知症への取り組み」と題して、徳山中央病院の沼文隆副院長が発表した。認知症患者が身体的な病気を来して入院した際に、急性期診療がスムーズに行えるように、認知症ケアチームが中心となり多職種で連携する取り組みが提示された。

3) 「認知症カンファレンス記録用紙の改善に向けた取り組み」と題して、九州病院看護部の倉本佳代子さんが発表した。認知症ケア加算1に準じてチームで認知症カンファレンスを行う際に多職種間で情報を共有するための、記録用紙の改善点が報告された。

4) 「高齢者におけるレクリエーション活動の有効性について」身体的・認知的機能への影響」と題して、三島総合病院看護課の向笠亜子さんが発表した。地域包括ケア病棟におけるレクリエーション活動が身体的機能の向上に有効であることが示された。

5) 最後に「地域型認知症疾患医療センターとしての認知症診療」と題して、諫早総合病院の長郷国彦院長から指定発言があり、地域型認知症疾患医療センターとして、外来および入院診療の取り

組みと問題点が提示された。

以上、本シンポジウムでは、5施設から認知症診療に関する現状と問題点が提示され、JCHOにおける認知症診療の方向性を討論する良い機会となった。

シンポジウム2

「JCHO病院間の医師
派遣への対応 感想」

座長（秋田病院 院長）

石岡 隆



JCHO病院の中で特に医師確保困難で診療機能の維持困難な病院に対し、

比較的余裕のある病院から医師派遣が行われることで、派遣先の病院では最低限の医療が確保され大変有難く感謝している。一方派遣された医師にとっても、普段の診療では体験できないような経験が得られ有意義であったとのことである。

しかしながら、派遣元の病院としても派遣している間の負担は大きいものがあり、通常の診療に影響が出ないように工夫が求められている。現在、常勤医はもちろん、初期研修医や後期研修医、JCHO版病院総合医育成プログラムなどを

活用しての派遣が行われているが今後期待したい。又応援医不在の期間が生じている問題が指摘されたが、初期研修医と後期研修医の組み合わせや、複数病院を組み合わせるなどのJCHO本部の派遣調整に期待したい。

シンポジウム3

「JCHOにおける健康
管理センターの役割」

座長（相模野病院 院長）

大井田 正人



本シンポジウムは、残念ながら他の会場に出席する方が多かったためか空席が

目立った。しかし、各施設の演題に対し演者間ならびに会場から活発な質問と議論がなされた。

健診センターは病院の規模、周辺医療環境、地域特性により収益は異なるが、四日市羽津医療センターのように健診センターの収益が病院収益を超える施設もあり、その高い収益率が発表され、病院経営の要であることが再認識された。高収益、高収益率の要因としては各種の才

シンポジウム4

「各病院が取り組むべき課題（個別病院ごとの課題）」への取り組みと経営改善

座長（東日本地区事務所 統括部長）

木村 晴行



プシオン検査、営業担当者による新規契約先の確保、既存健診先の維持など企業努力を行っている事であった。ただ、この健診という「金の卵」を維持する課題の一つとして、施設の規模に関わらず3名という健診事務職員の定数化は、事務作業の遅延など運営に支障をきたしている事が報告された。

最後に、日本経営笹氏が今後着目すべき経営視点等について説明した。Libraを活用し、DPC病院の入院期間等について具体的に問題点を説明し、今年度後期に取り組むべき新たな課題に繋がる有意義なものであったと思う。

本シンポジウムでは、取り組み開始から約半年が経過したことから、全体的な取り組み状況等について本部改善指導課から報告、続いて取り組みが進んでいる病院の事例について各地区事務所統括部長から報告し、当該病院事務（部）長から取り組みを進めるに当たり苦労した点等を説明した。具体例を示すことにより、イメージが掴みやすくなり参考となったのではないかと思う。

「各病院が取り組むべき課題」が示された。この課題は、病院運営を行う上で非常に重要な項目（診療報酬関係・病床管理等）が網羅されており、更に、従来は全病院横並びの画一的指導が多かったところであるが、今回示された課題は個別病院の特性や弱点を踏まえ、病院毎に異なる課題が示された。



本年、5月に開催された「事務（部）長、看護部長・総看護師長会議」において、

《 きょうは『将棋の日』 》

一般社団法人地域医療機能推進学会事務局長

中村 仁

6月21日11時。「特別講演」を依頼している講師から突然連絡が入った。「11月にアメリカで行われる学会の発表割当が本日決まり最終日の午後になってしまった。一番早い直行便で帰ってきて成田到着が17日の15時15分になる見込みです」

それでは講演時間に間に合わない。開催日まで5ヵ月を切っておりプログラムの変更は不可能だ。早急に講師を変更することとなった。

またしても「時間との勝負」が始まった。しかし、学会シーズン真っ盛りの11月に日時場所限定で都合よく引き受けてくれる著名人なんているだろうか。不安に駆られつつも慌ただしく講師の選定と出演交渉に取り掛かった。

6月26日18時。「羽生善治さんが快諾してくれました」と吉報が届いた。これは凄い。羽生さんは史上最強の棋士であり知名度も抜群だ。しかも今年は14歳棋士の活躍で空前の将棋ブームが起きている。大至急ポスターを刷り直してみんなに知らせよう。

11月17日15時半。羽生さんを乗せた車が会場に到着した。竜王戦七番勝負を激戦中の羽生さんが本当に来てくれた。凛とした眼差しがとても印象的だ。16時。大観衆を前に羽生さんの講演が始まった。

朝読んだ新聞に《きょうは『将棋の日』》と書いてあった。これも何かの縁だろう。

参加者の皆様、ご協力いただきました学会理事並びに各部会の皆様、運営スタッフの皆様に事務局一同心より御礼申し上げます。事務局では『第4回JCHO地域医療総合医学会』の開催準備に取り組まっております。多くの皆様方の参加をお待ちしております。

《第4回 JCHO 地域医療総合医学会》

会期：平成30年11月16日（金）・17日（土）
会場：TKP ガーデンシティ品川・JCHO 本部研修棟
会長：山崎芳郎 JCHO 大阪病院 院長

参加者の声



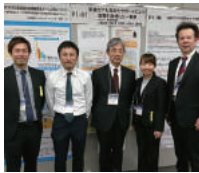
FPDによるX線量の軽減に向けた撮影条件と撮影業務の効率化について2演題発表しました。多くの時間を費やしての発表で達成感を味わい、他施設の先輩方々の発表では、まだ登山道の入口だと実感もしました。技術の習得に励みつつ、若手三姉妹でもっと明るい放射線部にします。船橋中央病院 診療放射線技師 船橋三姉妹 (左から 鈴木明日美、丹治星羅、風巻藍夏)

・初めて参加出来ました。発表も少し緊張しましたが、教育セミナーで講演頂いた田口亜希様が講演後星ヶ丘厚生年金病院(現:星ヶ丘医療センター)でリハビリをされていたと伺うなど貴重な体験をさせて頂きました。星ヶ丘医療センター 主任臨床工学士 荒尾 正・尾身理事長をはじめ、普段は話す機会のない各病院スタッフと専門的な情報交換もでき、とても有意義な学会参加となりました。早速、業務改善に取り組んでおります。宮崎江南病院 主任臨床工学士 淀川 菜穂子 今後もJCHO(ジェイコー)に臨床工学士(りんこー)在りの活動をさせて頂ければと思います。



プログラムの種類が多く見所満載であり、有意義な2日間でした。今回、発表を通じて、転倒リスク因子に関する調査内容を発信し、ご意見を頂き転倒防止に向けた取り組みのヒントを掴むことができました。また、懇親会など人材交流を深める場があり、他JCHO施設の情報の交換や共有ができ、自己啓発にもなりました。福岡ゆたか中央病院 理学療法士 横田 昌誠

JCHO唯一の病院併設の療養施設「健康増進ホーム玉造」の活動を紹介させて頂きました。また、他院の様々な取り組みを知ることができ良い刺激となると共に、ホームでの活動や日々の業務に活かすヒントを得る事が出来ました。この2日間、自他院の方々との交流も多く有意義な経験をさせて頂き、とても感謝しています。玉造病院 理学療法士 吉野 一太



院内で予演会や推敲を重ね、職種に関らず自施設全体でチームとして学会に臨むことができ、より一体感を高めることが出来ました。また、学会では日々の臨床や次回の学会発表へのヒントなど、気づきや刺激、学びを多く得る機会となりました。今回の経験を活かし、日々の業務により精進したいと思います。うつのみや病院 理学療法士 佐々木 諒平

羽生善治棋士の特別講演で、対局では「3手先を考え、相手の1手を予測し、多くの評価基準の中からその局面を正しく評価する」と話され、看護の観察、アセスメントと似ていると感じ、「人の気持ちを思いやり、時代、環境が変わっても挑戦する気持ちを持つ」との言葉に、地域医療に向けて力を注ぎたいとの思いを新たにしました。船橋中央病院 患者様相談室(保健師) 中川 芳江



リハビリセンターから3演題発表しました。大嶋「他病院の取り組みや課題を聞き、次のステップを目指す刺激になりました。」渡邊「発表者間で刺激し合い準備から発表まで楽しいJCHO学会でした。」石月「地域包括ケア病棟のみんなの頑張りを発表できて良かったです。」力を合わせた発表となり、成長できた学会でした。三島総合病院 理学療法士 渡邊太樹、大嶋恭平、石月亜由美

リハビリ部門だけでなく、他分野の研究発表、更に羽生善治棋士の話まで聞く事ができ、大変貴重な体験ができた学会でした。地域包括ケア病棟についてポスター発表を行いました。質問や情報交換なども意義のある機会でした。この機会を現場で活かしたいと思います。佐賀中部病院 理学療法士 居石 理彦



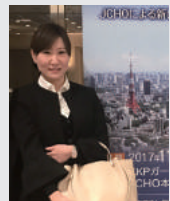
学術以外のテーマである病院健全運営や人材育成、地域社会貢献のシンポジウムでは、大きな刺激を受けJCHO学会が自己啓発の場でもあることを強く実感しました。そこで私は、研究者以外の若手(事務)職員の方々の参加を推奨します。必ず意欲が掻き立てられると思います。りつりん病院 薬剤科長 阿部 武由

初めての参加が発表という事で緊張しましたが、データ受付や口演の段取り等スムーズに対応して頂きました。普段、職種に直結した学会では他部門の情報が得られる機会は少ないので、総合学会特有だなと感じながら色々な会場を渡り歩きました。得るものが多く、有意義な経験が出来たので今後の業務に生かしたいと思います。りつりん病院 副診療放射線技師長 林 美紀



「ウロストーマ造設患者における退院後訪問導入の取り組みと今後の課題」の発表を行ってきました。初めての学会発表でとても緊張しましたが、他の病院の様々な取り組みや看護を聞くことができ、日々自分が行っている看護を見直すきっかけになりました。諫早総合病院 看護師 立石 さやか

今回ラダー研修で、看護研究計画書の作成に初めて取り組み、JCHO学会で発表することができました。無事発表できたことは私にとって大きな学びであり達成感を感じることができました。また、他施設の取り組みを知ることができ、JCHO学会への参加は私にとって貴重な経験となりました。埼玉メディカルセンター 看護師 梶野 末緒



第3回 JCHO 地域医療総合医学会 講師・座長・シンポジスト・指定発言者一覧

特別講演 「人工知能と人間の感性」

【講師】羽生 善治(将棋棋士) 【座長】尾身 茂(一般社団法人地域医療機能推進学会 理事長/JCHO 理事長)
会長講演 「私の出会いと学び、それを JCHO のミッションに生かすために」
【講師】絹川 常郎(中京:院長) 【座長】内野 直樹(理事)

継続テーマシンポジウム1 地域医療の革新と地域づくり

【座長】細田 洋一郎(埼玉:院長) 島田 信也(熊本:院長) 【シンポジスト】椎葉 茂樹(厚生労働省大臣官房審議官) 関塚 永一(国立病院機構埼玉病院 名誉院長/セコム医療システム 顧問/和光福祉会 理事長) 猪山 賢一(熊本:病理診断科 部長) 新町 智穂(宮崎江南:地域医療連携室 看護部長)
--

継続テーマシンポジウム2 特定行為研修制度を活用した地域医療への貢献に向けて

【座長】中野 恵(理事) 吉浪 典子(本部:企画経営部患者サービス推進課長、研修センター看護研修課長) 【シンポジスト】山内 豊明(名古屋大学大学院医学系研究科 教授/放送大学大学院 客員教授) 渋谷 智恵(公益社団法人日本看護協会 看護研修学校 認定看護師教育課程 課長) 関根 信夫(東京新宿:院長) 山地 陽子(東京新宿:看護部)
--

継続テーマシンポジウム3 人材の育成

【座長】山崎 芳郎(大阪:院長) 田中 真紀(久留米:院長) 【シンポジスト】酒井 礼子(東京新宿:看護部) 服部 南美(久留米:看護課) 若林 崇雄(札幌北辰:総合診療科) 山東 剛裕(星ヶ丘:総合内科部長、消化器内科部長、統括診療部長、院長補佐) 吉住 奈緒子(本部:企画経営部医療課長)

継続テーマシンポジウム4 事務職に求められる病院マネジメント

【座長】宇口 比呂志(理事) 内野 直樹(理事) 【シンポジスト】廣田 啓佑(本部:財務経営アドバイザー、株式会社日本経営 主任) 高園 忠助(本部:財務経営アドバイザー、株式会社日本経営 次長) 内野 直樹(理事) 【指定発言者】万代 恭嗣(東京山手:院長) 中城 博見(伊万里松浦:院長)

シンポジウム1 地域包括ケアにおける認知症への取り組み、これまでとこれから

【座長】那須 誉人(徳山:院長) 高嶋 修太郎(高岡ふしき:院長) 【シンポジスト】高嶋 修太郎(高岡ふしき:院長) 沼 文隆(徳山:副院長) 倉本 佳代子(九州:看護部) 向笠 亜子(三島:看護課) 【指定発言】長郷 国彦(諫早:院長)
--

シンポジウム2 JCHO 病院間の医師派遣への対応

【座長】石岡 隆(秋田:院長) 関根 信夫(東京新宿:院長) 【シンポジスト】山川 元太(東京新宿:消化器内科) 伊藤 美夫(登別:院長) 酒井 賢一郎(九州:総合診療部部長) 吉住 奈緒子(本部:企画経営部医療課長)

シンポジウム3 JCHO における健康管理センターの役割

【座長】住田 安弘(四日市羽津:院長) 大井田 正人(相模野:院長) 【シンポジスト】五十嵐 敬子(相模野:健康管理センター管理部長) 岡本 将裕(神戸:健康管理センター長、放射線科診療部長) 位田 浩(四日市羽津:健康管理センター管理課長) 岸川 秀樹(熊本:副院長、健康管理センター長)

シンポジウム4 「各病院が取り組むべき課題(個別病院ごとの課題)」への取り組みと経営改善

【座長】木村 晴行(東日本地区:統括部長) 柳沢 直樹(北海道四国地区:部長) 【シンポジスト】森 元春(東海北陸地区:統括部長) 新田 晴久(近畿地区:統括部長) 高尾 安則(九州地区:統括部長) 井澤 裕匡(本部:企画経営部改善指導課長) 菅 真人(株式会社 日本経産ヘルスケア事業部 副部長)
--

特別企画「JCHO が地域から信頼される病院となるための提案」

【座長】住田 安弘(四日市:院長) 磯谷 聡(中京:薬剤部長) 【演者】加藤 友也(中京:総合診療科医員) 渡辺 朋子(人吉:副看護部長) 末松 文博(九州:薬剤部長) 前島 澄子(札幌北辰:臨床検査技師長) 猪狩 玲子(さいたま北部:栄養管理室長)
--

教育セミナー1 「地域包括ケアと ICT ～多施設・多職種連携を目指す、天かける医療介護連携事業の課題～」

【講師】佐野 弘子(NPO 法人 天かける:理事)

教育セミナー2 「東京 2020 パラリンピックを契機にした共生社会の実現」

【講師】田口 亜希(アテネ・北京・ロンドンパラリンピック射撃日本代表、日本郵船株式会社 広報 CSR グループ 社会貢献チーム)
--

教育セミナー3 「医療分野、病院、介護施設等における「システミック・コーチング」

【講師】桜井 一紀(株式会社コーチ・エイ 専務取締役)

教育セミナー4 「睡眠習慣を整え、キラキラ輝く私に!! ～知られざる睡眠の働きを知り、質の良い眠り～」

【講師】白井 礼司(東洋羽毛工業株式会社・一般社団法人睡眠教育機構認定 睡眠健康指導士)
--

教育セミナー5 「新しい時代に入った IBD の内科治療～当院におけるバイオシミュラーの使用経験を踏まえて～」

【座長】梅枝 覚(四日市:副院長) 【講師】吉村 直樹(東京山手:炎症性腸疾患内科 部長)
--

一般演題 口演発表(282 題)

テーマ	演題数	座長
安全(感染・褥瘡防止)	6	来見 良誠(滋賀:院長)
運営(組織マネージメント)	6	渡部 昌平(宇和島:院長)
運営(人材育成)	12	野田 晏宏(福岡ゆたか:院長)、佐々木 功典(下関:院長)
地域包括ケア	13	山田 光俊(高知西:院長)、高取 吉雄(湯河原:院長)
高齢者医療	4	石井 耕司(東京蒲田:院長)
連携(患者-医療者のパートナーシップ)	12	長郷 国彦(諫早:院長)、田中 小百合(大阪:看護部長)
連携(地域連携)	12	村本 弘昭(金沢:院長)、芳賀 克夫(天草:院長)
安全(医療安全・医療事故調査制度)	12	下川 恭弘(人吉:副院長)、小澤 俊総(山梨:院長)
連携(チーム医療)	39	多治見 司(九州:院長)、中馬 敦(東京東城:院長)、藤田 宜是(横浜:院長) 浅見 昭彦(北海道中部:院長)、田代 雅彦(群馬:院長)、黒田 豊(さいたま北部:院長)、服部 一夫(東京蒲田:薬剤科長)
診療	18	河野 幸裕(若狭高浜:院長)、高橋 昌宏(札幌北辰:院長)、木村 健二郎(東京高輪:院長)
医療技術	52	瀧本 英治(九州:臨床工学技士長)、片山 孝文(中京:臨床検査技師長)、田附 満(札幌北辰:理学療法士長)、島崎 千尋(京都鞍馬口:院長)、大友 敏行(神戸:院長)、大泉 隆(大阪:診療放射線技師長)、古家 乾(北海道:院長)、氏原 健吾(諫早:診療放射線技師長)、後藤 英司(保土ヶ谷:院長)
地域医療・介護(介護)	23	草野 英二(うつのみや:院長)、森崎 訓明(りつりん:診療部長)、松村 正彦(大和郡山:院長)、白尾 一定(宮崎江南:院長)
地域医療・介護(医療)	11	根橋 良雄(湯布院:院長)、岩崎 厚子(桜ヶ丘:総看護師長)
連携(退院調整)	5	池田 登(玉造:院長)
安全(医療の質の向上)	23	田熊 淑男(仙台:院長)、横須賀 收(船橋:院長)、松田 義雄(三島:院長)、兜 正則(福井勝山:院長)
検診	6	岸田 喜彦(可児:院長)
内部統制・リスク管理	6	松本 昌泰(星ヶ丘:院長)
情報	5	朝倉 徹(仙台南:院長)
接遇・患者サービス	12	六角 裕一(二本松:院長)、室谷 典義(千葉:院長)
運営(病院運営)	5	森本 章生(南海:院長)

一般演題 ポスター発表(150 題)

テーマ	演題数	座長
地域医療・介護(その他)	7	佐藤 美樹(うつのみや:看護部長)
地域医療・介護(介護)	13	長谷川 美穂(東京山手:看護部長)、瀬高 香澄(熊本:看護部長)
地域医療・介護(医療)	10	江井 洋(仙台:理学療法士長)、告川 咲月(人吉:看護師長)
運営(病院運営・組織マネージメント)	7	田中 敬子(相模野:看護部長)
連携(チーム医療)	21	市原 京子(船橋:看護部長)、今 麗子(東京高輪:看護部長)、国府 孝敏(大阪:薬剤部長)、徳永 圭子(東京山手:栄養管理室長)
患者サービス他	10	福田 妙美(諫早:看護部長)、堀 由美(北海道:看護部長)
安全(医療の質の向上)	11	鈴木 佐紀(仙台南:看護部長)、野村 仁美(金沢:看護部長)
医療技術	15	小川 祐司(大阪:臨床検査技師長)、吉田 亘孝(四日市羽津:診療放射線技師長)、青木 寛幸(東京東城:理学療法士長)
運営(人材育成他)	13	原 いづみ(宇和島:副総看護師長)、小泉 由貴美(札幌北辰:看護部長)
診療	4	堀江 好一(さいたま北部:診療放射線技師長)
地域包括ケア他	11	長野 真(京都鞍馬口:理学療法士長)、瀧 昌也(中京:理学療法士長)
連携(地域連携他)	12	井出 志賀子(埼玉:看護部長)、尾崎 美智恵(神戸:看護部長)
安全(感染・褥瘡防止他)	10	坪内 純子(玉造:看護部長)、本田 康恵(福井勝山:総看護師長)
安全(医療安全・医療事故調査制度)	6	大矢 早苗(中京:看護部長)

平成29年度 職場チームによる 業務改善の取り組み・理事長特別賞 表彰式

Topics



平成 29 年 11 月 17 日(金)、第 3 回 JCHO 地域医療総合医学会の会場において、「職場チームによる業務改善の取り組み」及び「理事長特別賞」の表彰式が執り行われました。

魅力ある職場づくり推進の一環として創設されたこの二つの表彰制度は、日々職場内で課題に取り組まれている「改革」の姿勢を奨励するとともに、特に優秀な模範となる取り組みを JCHO 全体で共有していくことを目的としています。

今年度の受賞者と受賞チームをご紹介します。

◆理事長特別賞

●埼玉メディカルセンター

細田 洋一郎 院長



業務に関する極めて顕著な功績を挙げた職員に対して授与される理事長特別賞は、埼玉メディカルセンターの細田院長が表彰されました。

細田院長は、東日本地区担当理事として管内病院の運営に貢献されるとともに、JCHO 全病院長の意見集約・調整という重責を果たしてこられたほか、地域においても強力なリーダーシップを発揮し、認知症初期集中支援チームの受託など、JCHO のミッションである地域包括ケアを推進し、地域への多大な貢献をされました。

加えて、病院経営においては 3 期連続黒字経営も達成し、JCHO 57 病院中トップクラスの成績で、中期計画達成に向けて JCHO 全体を牽引する役割を果たされました。

◆職場チームによる業務改善の取り組み 最優秀賞

●玉造病院

手術室看護研究チーム

▼「腹臥位脊椎手術における顔面の接触圧を指標とした頭部支持枕の高さの検討」医療従事者を対象とした接触圧測定とアンケート調査より見えてきたこと」
(コメント)

平成 29 年度職場チームによる業務改善の取り組みにおいて、最優秀賞という評価をしていただき、驚きと同時に大変光栄に思っています。手術看護の基本である体位に着目し、腹臥位脊椎手術での頭部支持枕の高さをチームの協力を得て研究し、その成果が安全なケアの提供につながっています。既に、次の検証という取り組みも始まっており、今回の受賞を受けてその意欲は益々高まっています。本当にありがとうございます。

〈チームメンバー〉

難波弘子(看護師)、白根美倫(看護師)、南喜代美(看護師長)



●宇和島病院
チームJACO（じゃこ）

▼「老健の経営健全化プロジェクト」
〔コメント〕

この度は優秀賞をいただき感謝申し上げます。チーム名の「JACO（じゃこ）」は宇和島の代表的な郷土料理「じゃこ天」から名付けました。宇和島老健は入所率は悪くないものの厳しい経営状態が続いていましたが、問題点を明確にし、多職種が協力して業務改善に取り組みることにより上半期で黒字転換を果たすことができました。今後も継続してこの取り組みを行い、安定した経営によりさらに地域に貢献していきたいと思えます。

〔チームメンバー〕



松岡玲子(看護師長、伊藤護師長、藤江美正(副作業療法士長、濱田千鶴(管理栄養士)、宇治原美香(主任医療社会事業専門員)、他

●東京新宿メディカルセンター
特定行為プロジェクトチーム

▼「施設内で完遂する特定行為研修プログラムの成功を目指して」
未来の医療を支える看護師を育成しよう！

〔コメント〕

300時間を優に超える特定行為研修を全て院内で行うなんて！とても遠くに見えたゴールに向かって始まった私達の取り組みは、看護部の熱意とそれに後押しされた医師・薬剤師総勢60名のバックアップによって完遂することができました。これこそ当院の特徴として日頃から大事に培ってきたチームワークの賜物であり、今回ご評価いただいたことは何よりの喜びです。次は輩出された人材をどう活用するか、新たな課題が始まります。



〔チームメンバー〕
堀江美正、森下慎二、萩原栄一郎、関根信夫、酒井礼子、堂園道子、野月千春、他15名

●四日市羽津医療センター
総務企画課チーム給与

▼「エクセルを使用した勤務時間管理簿の活用による業務改善に係る職場チームの活動」

〔コメント〕

業務改善の成果が認められ感謝いたします。エクセル関数の改良作業手順の見直し、作業時間の管理に取り組み、少人数化と作業時間の短縮ができました。私たちの提案を施設全体で受け入れ、早期の導入に各職場が協力してくれたこともうれしく思います。今後は、タイムレコーダーとの連動や、勤務データを生かした健康づくりに取り組みでいきたいと思えます。

〔チームメンバー〕



大川奈緒子、諸岡隆子、葉優佳、渡部康二、尾崎加代子、前川玲子、清水理奈子、市川叶大、辻美波

●大阪病院
看護ケア推進会議CN/CNSS会

▼「訪問します！健康講座」
〔コメント〕

CN/CNSSによる「訪問します！健康講座」の活動に優秀賞を頂き深く感謝いたします。

今後私たちは、以下の3つの取り組みを行ないます。まず、地域住民が気軽に相談でき、看護の悩みを解決できる関係性を更に拡大します。次に、地域の医療機関にも講座の対象を挙げ、地域全体の看護ケアの向上を目指します。最後に、今後も事務担当者の協力を得ながら、CN/CNSS自ら地域に出向き、積極的・継続的に広報し、健康講座を拡大できるようにメンバー1人1人が努力していきます。

〔チームメンバー〕



中村明美・酒井圭子・吉田多紀・中西由香・前田由香・伊坪恵・松山佳子・田野岡文子・澤井真理、助産師・高橋有美、総務企画課・岩田順心

●伊万里松浦病院
くちプロジェクト

▼「摂食嚥下委員会の効果的な取り組み」
摂食機能療法の件数UPに向けて！

〔コメント〕

この度は我々の活動を評価して頂き、誠にありがとうございます。当院摂食嚥下委員会は「早期より口から食べる（通称くちプロジェクト）」を合言葉に医師、看護師、作業療法士、理学療法士、管理栄養士の多職種チームにて活動しております。一人でも多くの患者さんを元気にできるよう、我々はこれからも日々努力してまいります。今後はJCHOMISSIONに基づいた地域住民、医療介護従事者向けの出前講座等を推進してまいります。

〔チームメンバー〕



日浦卓郎(医師)、田邊勝久(副看護師長)、久保田真理(副看護師長、大山香(看護師)、柿谷大貴(看護師)、岡本幸江(看護師)、中尾美智子(管理栄養士)、金子兄太(作業療法士)、牟田友里(理学療法士)

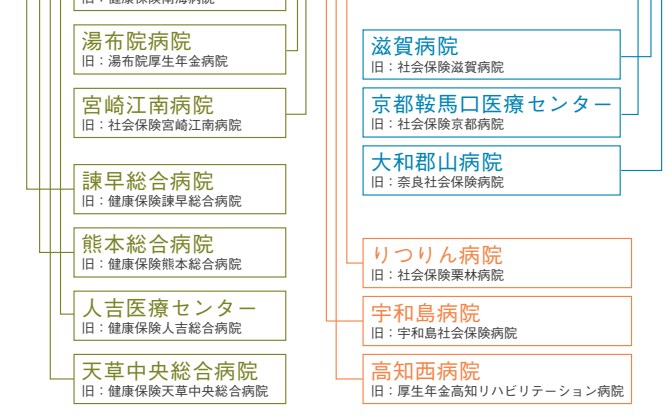
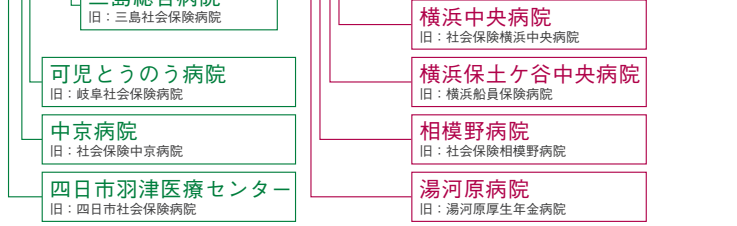
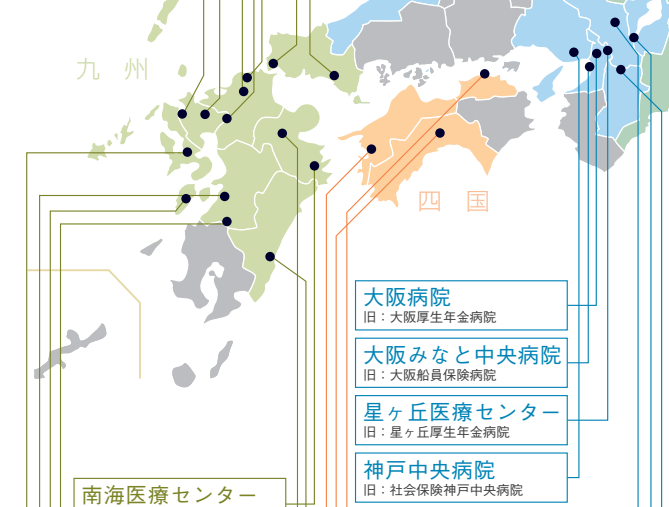
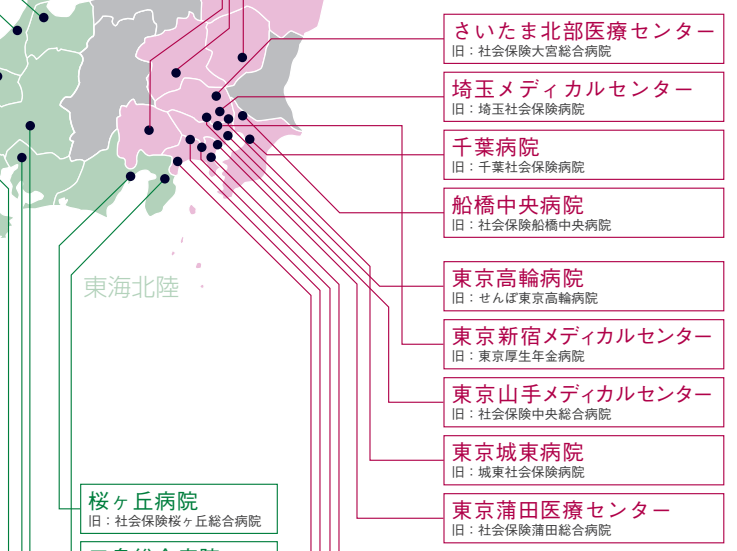
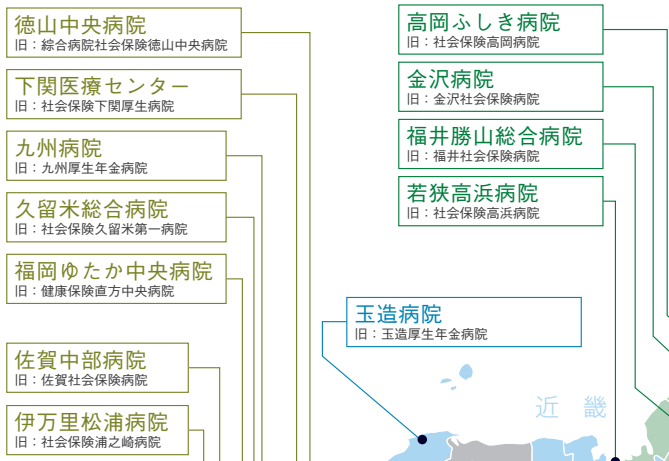
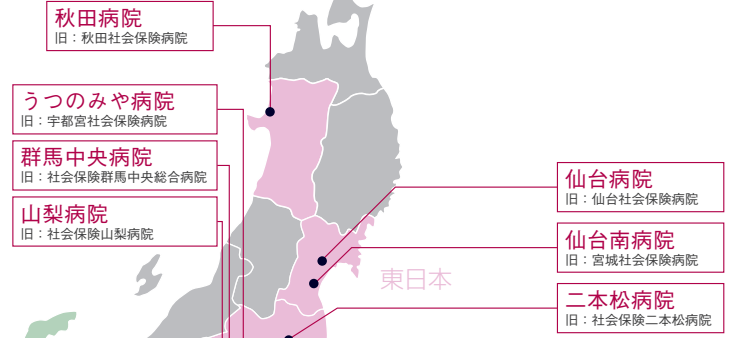
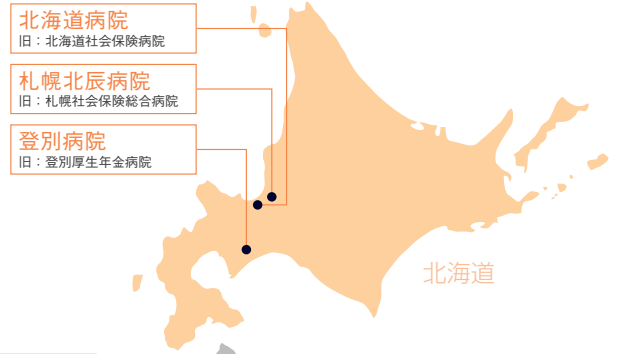
安心の地域医療を支える

JCHO GROUP

地域医療機能推進機構
全国病院MAP

本部

〒108-8583 東京都港区高輪3-22-12 URL <http://www.jcho.go.jp/>
TEL:03(5791)8220 FAX:03(5791)8258



JCHO「理念」
 我ら全国ネットのJCHOは
 地域の住民、行政、関係機関と連携し
 地域医療の改革を進め
 安心して暮らせる地域づくりに貢献します

地区事務所

本部北海道四国地区管理部 〒108-8583 東京都港区高輪3-22-12
 東日本地区事務所 〒108-0074 東京都港区高輪3-22-12 1F
 東海北陸地区事務所 〒457-0866 愛知県名古屋市中区三條1-1-10 中京病院健康管理センター内
 近畿地区事務所 〒553-0003 大阪府大阪市福島区福島4-2-78 JCHO大阪病院別館3階
 九州地区事務所 〒806-0034 福岡県北九州市八幡西区岸の浦1-8-1 九州病院内

URL
<https://www.jcho.go.jp/>



JCHO×ニュース

「ジェイ・コミュニケーションズ」

2018 WINTER

冬号 vol.16

独立行政法人地域医療機能推進機構 〒108-8583

東京都港区高輪3丁目22番12号

tel:03-5791-8220